

そのヒグマは、自ら釣り人に近づいて来たとみられるという。上川管内幌加内町の朱鞠内湖で起きたクマによる釣り人の死亡事故。人里離れた場所で起きたように見えるが、近年目立つ「人を恐れないクマ」の生息が拡大していることも浮き彫りになった。

日高管内に住んでいた三十年近く前、港に近い警察署の裏の水産加工場で、倉庫がクマに荒らされたことがあった。当時の自宅は警察署より山側。クマは山から降りてきて、わが家の近くを通過して港に行ったのか。しばらくは仕事や飲みに出て帰宅が遅くなる日は、周囲に注意しながら歩いたことを覚えている。

夜道でドキドキしながら歩いていると、前から来る人や自転車までクマに見えた。これまで笑い話として語ってきたが、市街地や住宅地でも夜道でクマに遭遇する危険は、いまや全道に広がっている。

雪解けが早かった今年、道内ではクマの出没が続いている。中山間地域だけでなく、道都・札幌市内も西区などで目撃情報が相次ぎ、道内第二の都市である旭川市でも出没が続く。札幌の住宅街の近くには既に一

クマはそばにいる

○頭以上が生息しているという。

クマによる重大な事件といえば、小説のモデルにもなった三毛別事件や、札幌丘珠事件などが知られるが、ほとんどが開拓期の昔話だった。だが、一昨年の札幌市東区市街地への出没などを見ると、かつてクマと人間の暮らしを隔てていた見えない壁が、都市部でも崩れてしまったように思える。

クマの急増や、人との接近にどう対応していくのか。野生動物との共存は、自然に任せるしかない側面があるとはいえ、頭数管理や将来的なあり方を示すのは政治・行政の役割だ。道はその役割を果たしているといえるのだろうか。

道内のクマの推定生息数は一九九〇年度の五二〇〇頭から、二〇二〇年度に一万七〇〇頭へ倍増した。要因として語られるのが、冬眠中や冬眠明けのクマを狙う「春グマ駆除」の廃止だ。道は横路孝弘知事時代の一九九〇年に春グマ駆除をやめ、共生へかじを切った。自然との共生を求める時代の要請による判断だったが、時の流れと共に人口減少による中山間地の荒廃やハンターの高齢化なども重なってクマは増え続けている。

市街地周辺への出没などを受け、道は今年春、冬眠中を狙う穴狩りや親子グマ駆除などの「春期管理捕獲」を始めた。頭数の減少を狙ったかつての春グマ駆除とは異なり、市街地への出没の予防が目的だが、保護一辺倒から頭数管理へかじを切らざるを得なかったのが実情だ。

今後も道内は人口減少や森林・中山間地の荒廃が加速し、クマの生息域は拡大することが予想される。今ある危険にどう向き合い、北海道の将来像に関わる野生動物との関係をどう描いていくのか。自然環境への考え方や政治思想などもからみ、多くの論点があるだけに、道議会や市町村議会ですっかり議論しなければならぬ。クマなどの野生動物との関係のあるべき形を考えることは、北海道の地方自治の喫緊の課題ともいえる。

クマは私たちのすぐそばにいる。道民とクマがどうすれば適切な距離を保つことができ、私たちがこの先も安心して暮らしていけるのか。この危機に対応すると共に、どんな共存の将来像を描くのか。議論のたぐいに残された時間はそれほど多くない。

ハ転V